

備中話

上房郡

三

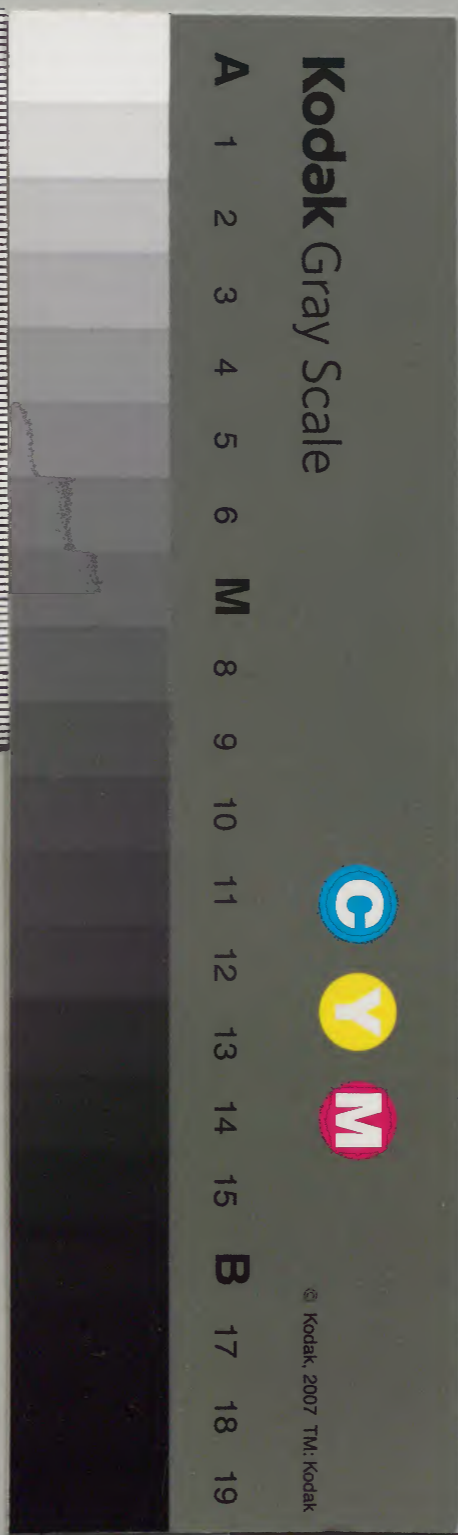
			和書門類
	二九三	二九三	
	一三四	一三四	
	二九	二九	
一三	一三	一三	
冊	架	函	號

閣 8

庫	文	閣	內
七五	二九三	和	
函	一三四	書	
一三	二九	類	
架	一三		

內一〇七
地五八

內閣文庫	
番號	和 29314
冊數	13 (3)
函號	175 180



周

備中訪卷之二

目錄

上房郡上田村

松山

松山城之傳記

松山雜興

松原山

松山殿頭

城主整代

五岩

高倉山

加羅之橋

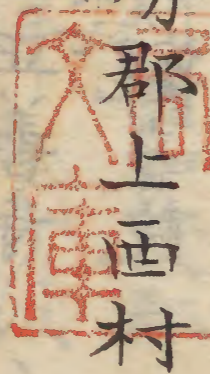
松山川





備中話卷之二

目錄



上房郡上西村

一松山

一城主歷代

一歷代城主傳記

一五岩

一松山雜興

一高倉山

一松原山

一加羅々々橋

一松山饅頭

一松山川

丙一〇七五三號

一 鷄足山
一 寺院

頼久寺

松連寺

威徳寺

西明寺

法藏寺

長西寺

正善寺

安養院

智道寺

水元
観音院

上房郡

西川上郡北、阿賀郡南、加陽郡

東備前國加茂郡

名義詳るるに、と加陽郡属す

延長武、初名抄見す、と乃以此

郡を置れし、と拾芥抄

初く是あり

村敷二十ヶ村 或ハ七ヶ村

高武萬四子五百九十四石六斗五升五合

武部万部子五石七斗七合八勺

御名、初名抄、加陽郡の部と云、巨勢

有漢字方多氣

村七十四 寛永中 内本村二十 枝村十四 高一万子四百四石壹斗三合

上房郡

當時村数二十八石之通

松山東村 松山西村 吉川村

黒山村

上田村

湯山村

倉地村

矢野村

岩村

六名村

宮瀬村

片岡村

柳分村

八川村

上津村

有納村

室納村

貞村

竹井村

黒土村

川面村

今津村

川尻村

長代村

垣村

有漢上村

中村

山下村

今新林 山園林 舟下林

山園林 舟下林

舟下林

舟下林

舟下林

舟下林

舟下林

舟下林

原西村部

一本町 林山部

一本町 林山部

一本町 林山部

一本町 林山部

一本町 林山部

一本町 林山部

一本町 林山部

一本町 林山部

原西林

原西村

高八百九拾九石三斗五升

同名所々あり一強河内

郡原

下総國

郡原

一小名

辻卷

小高下
木

奥灘

近頃億萬田ト改ム

松井

岸上

一郷中

東雲丁

南北十八丁

松山町

一本町

長サ 三丁四間

東^横五丁五通西横丁五通

一新町

長サ 三丁七間

一下町

長サ 三丁三間

東横丁四通西横丁四通

一鍛冶町

長サ 三丁三間

東横丁六通西横丁四通
横^三緋屋町アリ

一南町

長サ 五丁九間

原村分家端迄都合六丁三十八間を三余

一東町

長サ 三丁四間

東横丁五通

一延享元年人別

惣^家数千六百五口

千五百九拾七人

松山城を巡る地名

- 一坂口
 - 一^{アモビ}る砕木がたと
 - 一榎の木坂新紀坂
- 一久保下右衛門たご
 - 一上右衛門たご
 - 一^{ウラ}谷松井戸の谷なり
- 一桔梗の門たご
 - 一大正たご
 - 一^{ウラ}谷池床同下修と松切をい下と
- 一若池後の谷大田り
 - 一大正たご
 - 一^{ウラ}内丸
- 一お畑
 - 一井橋がぬお畑の向
 - 一^{ウラ}内丸
- 一池地杉谷
 - 一谷の丸下小麻谷
 - 一^{ウラ}内丸
- 一三乃丸やまん谷
 - 一^{ウラ}内丸

一 松山城を巡る地名

一 坂口

一 久保下右衛門

一 桔梗の門

一 若池後の谷

一 お畑

一 池地杉谷

一 三乃丸

一 砕木

一 榎の木坂

一 上右衛門

一 谷

一 大正

一 池床

一 井橋

一 谷の丸

一 内丸

一 松井戸

一 松切

一 池床同下修

一 小麻谷

一 丸

- 一 二本松
- 一 障子ヶ滝
- 一 猿尻
- 一 高陣
- 一 傾城ヶ尾
- 一 松ヶ石
- 一 陰軸
- 一 新山
- 一 赤佳
- 一 踐上ホリ
- 一 鼻丸
- 一 尾松
- 一 岩院
- 一 軸林

松山

江戸より百八十六里半

一 古秋葉庭三郎松山城築基の時大松山のこま
 城ありて後大松山小松山と神丸とよ各城あり
 天正年中三村元親落城の由りて城も廢し
 こまを寛永十六年あるは伊勢守松平隆定
 が權より所を小松山と城と築きたるに今
 の城あり大松山は大池の邊なるに寺あり
 祠あり松山の北のすゑに寺あり社の社あり是也

了神丸の跡あり

一 松山ハ昔は松山備中と云ふと高梁郡の内なる
り昔ハ城下の名を云ふ松山と云ふ元
弘西慶の記云松山又ハ下居城の時云ふ
松を改む松山といふ事ハ山の名を改む
土地の名ハ松山と云ふ事
云松山と云ふ果と書クハ漢土ハ高梁と云
地名あり云ふ事ハ詩云高梁ハ晋地ナリ

なり史記齊世家九葉討晋亂至高梁注高梁ハ晋地ナリ

一 松山城乃名と老牛伏草山と云ふ何しの時を

名々也云ぬぐと云ふの形を云ふと松山長ノ

老牛の字ハ外ス形ありと云ふ附牛山と云

牛山と云ふ事

悠記主基ノフニ卷ニ出ス

一 永和元年大嘗會主基才麻丸

備中松山 松方御方也

十傳乃益其れぬ——松の梢とさる
つらさるるるる

小鏡

宗法院

漢子もあふふ却ふるふふふふふふふふ
のの音とのこりるるる

よや買もの——のの原本さるるるるる

ゆい何うこそし
ゆい何うこそし
ゆい何うこそし

一松山社 三才圖繪ニ所祭車代主神

後光嚴院御宇建立と玉花万

羊ふ出

老牛伏草山歌 樂山香

名號終古傳老牛伏草山老牛不省老伏
草不食草惟是天地浩蕩中函取陰陽氣
無窮君不見蝸牛頭上雙尖角二國爭戰
蠻其觸甚殊老牛頭戴城鎮護一方輔

州牧又有古城元天間世上兵乱不安安一
且傾覆三村亡如彼蝸角觸共蠢懷舊時
登覽基空堪悽慘宜乎吳子言在德不在
險元和後四海太平水氏之時初今城々主幾
代替吾君中葉移封此地未如今踰百歲
金湯近境無比肩志兵革覺益堅可知清
門奕世治地利人和得兩全又不見石牛木牛
名亦假昔時一旦成功者不如老牛伏草山

長興國家共壽安

松山城主

巡宝永五年藤公御改寫

鎌倉賴朝公ヨリ第四代ノ將軍賴經公光朝

関白藤原道家公ノ四男也執權武藏守泰時ノ時代ニ相州三

浦ノ一族兼久戰功ニ依テ備中有漢ノ郷

ヲ城地ニ賜其後延應二庚子年老牛伏

草山ノ城ヲ為築タモウ普請奉行有漢

新左衛門横見三郎右衛門大工頭上

森新七

延喜二年三月

第一代

秋葉

三郎重信

兼久

戦功依_ニ城主ト_ナル寛政元年マ_テ五百七十年

成

第二代

秋庭又四郎信村

宝治合戦
寛政元年
近五百七十年亦尤

第三代

秋庭平六重連

第四代

秋庭小三郎義繼

第五代

秋庭三郎重知

第六代

高橋又四郎實名不知

元弘正慶比居城ノ由是マ_テハ松山ヲ高橋

ト云ヘリ是ヨリ松山下云フ寛政元マ_テ四百

六十年ニ_ナル

第七代

秋庭七郎重繼又松山歸

第八代

秋庭三郎重明

三郎重明貞治
年中ヨリ山名師
氏屬トテ國中

第九代

秋庭八郎頼重

從ハ八郎頼重平之九頼
備中守元重

第十代

秋庭平之九頼次

此後子孫有漢
三住居スト云ヘリ

第十一代

秋庭備中守元明右承久

ヨリ永正六年迄二百九十四年永正六年ニ備中

守卒ス

三洲小谷ヨリ国替

第十二代

上野兵部少輔頼久永正

六年ニ參多州小谷ヨリ来リ松山城主トナル永正

年中ニ頼久寺ヲ建立ス

第十三代

上野伊豆守

巡實名不知永正天文
比父子ヲ三年程城主
寛政元年迄二百六十年

第十四代

上野右衛門尉 是舍弟也

天文二年兄弟共ニ討取テ松山ノ庄為資ノ

戦功ニ卒ス

巡ニ同國ノ士庄為資植木秀長松山ヲ
攻テ伊豆守兄弟ヲ討取為資ハ城主ト尤
名ヲ備中守ト号ス

第十五代

庄 備中守為資

第十六代

庄 又六隆巡作高資 受領不知

第十七代

庄 修理輔 勝資 三代ニテ

永禄年中マテ三十年ホド居城ス永禄三年ニ

三村家親ノ戦功ニ依テ落城

寛政元年マテ二百
四十五年ニナル

第十八代

三村修理亮家親本国

參州ヨリ来當国成羽ノ城主トナル後毛利元就
屬シ加勢ヲ請ケ松山ノ庄高資ヲ討取城主ト
成ル夫ヨリ備中守ト改ム三村備中守家親源
清居士

第十九代 三村修理亮元親 天正三

亥年輝元大勢ニテ討取落城ス右ハ十五年居城

ス 巡三三村修理亮元親号尾張守永録年中ヨリ天正三年追父子十五年在城寛政
元年追九百十五年ホド織田信長ニ屬ス輝元多勢ヲ以テ松山ヲ攻ム天正三年
元親切服 元親ハ毛利元範ノ智ナリ

第二十代 毛利家ヨリ在番天野中

務元明

第二十一代 天野ナルシ 上野五郎右衛門是ハ毛利

家ヨリ代官トシテ差越テ有リ慶長五年濃州

関ヶ原偃武ノ後ヨリ退ク

第二十二代 御當代ニナリ御代官小堀

新介正次

第二十三代 小堀作介後改遠江守實

名ハ政一右ハ慶長二十六年

慶長廿年ニテ元和ト改元二十六年ハナレ

第二十四代

池田備中守長幸是因

州ヨリ別家也承国院前備中守

第二十五代

池田出羽守長成池田又

子毛利輝元織田信長ニ属ス

第二十六代

水谷伊勢守勝隆是寛

永十六年常州下館ヨリ引越今ノ城ヲ築セ

タモウ

第二十七代

水谷左京亮勝宗

第二十八代

水谷出羽守勝賢眞一作美元永禄

六年江戸表ニ於テ乱心ニテ稻葉伯耆守殿江

御預ケニテ其マ、七萬石召上ラル居城五十

五年御在番淺野内匠頭長規御城代駒

井内匠頭御目付堀小十郎御代官平岡吉

左衛門右ノ方々元禄七年正月二十三日ニ松山へ

到着廿三日御城請取相濟二十四日淺野

内匠頭歸城家臣大石内藏助残り相勤此

不審水谷氏代御城御普請相濟元年酉ノ
正月繩張畑角兵衛作事奉行永嶋万九郎
小葉師万助大工玉水喜右衛門

第二十九代

安藤對馬守重傳一作轉元祿

八年八月六日上州高崎ヨリ引越有リ寶永

年五月五日マテ十七年居城

第三十代

安藤右京進重行一作宗

第三十一代

石川主殿頭綱慶延享

元子年六月四日迄三十四年居城ナリ勢州亀

山へ國替

第三十二代

板倉周防守勝澄 龜山

ヨリ御越

第三十三代

同 美濃守勝武

第三十四代

同 日向守勝從

第三十五代

同 周防守勝政

第三十六代

同 周防守勝駿

第三十七代

同周防守勝職

第三十八代

同周防守勝靜

第三十九代

同周防守勝職

第四十代

同周防守勝職

第四十一代

同周防守勝職

第四十二代

同周防守勝職

第四十三代

同周防守勝職

第四十四代

一 おく太平記云承平年中純友子組乃

門逆徒ヲ集メテ以テ松山ヲ荒ル

一 續松系物語抄云

有云此者おく一之流也

松山乃松山也

吉備物語

松山ノ業加ふる有る也

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

改松山歴代城主

鑲倉頼朝公ヨリ第四^代將軍頼公ノ時ニ相州

光明峯寺関白藤原道家公四男治世十八年承久^{元年}八月鎌倉
三向頼經幼雅ナルニ依テ二位冠兼中ニ政ヲ聽ク一十八年世ニ冠將軍ト云
北條遠江守平時政ノ
娘也執政武藏守泰時

有漢ノ郷ヲ城地ニ賜ウ其後延應二年庚子

老牛伏草山ノ城ヲ築セタモウ普請奉行有漢

新左衛門横見三郎右衛門大工頭上森新七

第一代 秋庭三郎重信

承久戦功ニテ城主トナル延應二年城ヲ築シ

ヨリ嘉永二年マテ六百十年ニ至リ

第^二代 秋庭又四郎信村

第^三代 秋庭平六重連

第^四代 秋庭小三郎義總

第^五代 秋庭三郎重知

延應二年ヨリ元弘正慶ノ比マテ年數九十

三年右秋庭氏五代ニテ松山城相續ス

第^六代 高橋又四郎

實名不知元弘正慶ノ比居城ノヨシ其比マテハ

松山ヲ高橋ト云リ是ヨリ松山ト云フ山ノ名ヲ

取テ城下ノ名トス

元弘正慶ノ比ヨリ文和四年乙未マテ凡二十

四五年間高橋氏城主

第^七代 高越後守師秀

高師直ノ子高師泰ノ子細川頼之ニ属ス文和四年ヨリ

七歳ニテ城主トナリ
舊系ナリ
補之

康安二年貞治マテハ年間松山城主

第八代 秋庭三郎信盛 同上

右三郎信盛ハ歴代ニ入ラス師秀ノ後松山城

主タル人太平記理盡抄ニ因テ見ルハ秋庭三

郎ニシテ秋庭舊系ニ此七郎ヲ八代トス七郎ニアラス因テ三郎信盛ヲ

補ヒ入ル

三郎信盛ハ高師秀ノ執政ナリ然ルニ主

人師秀僻事多ニ因テ屢々諫言スレトモ

用ス却テ三郎ヲ害セントス故ニ主ニ叛キ山

名ニ属シ師秀ヲ追出し松山ノ城主トナル

太平記理盡抄ニ記スル其大略ハ南朝ノ山名

伊豆守時氏康安二年夏六月伯耆ヨリ美

作ノ院ノ庄ヘ打越テ国々へ兵ヲ分チ備中モ

侍大将ヲ差向ルニ郎ツイニ山名ニ属メ其侍

大将多治見備中守猶崎ヲ松山城ヘ引入

カハ師秀戦フベキヤウナリ備前徳倉ノ城

へ差退ト云リ委ハ理盡抄ニ出タリ下ニ
記スル師秀ガ傳ヲ見ルベシ
後太平記應安元年八月殿中ノ宿直
ニ小早川美濃守貞平秋庭三郎信
盛トアリ康安二年信盛ガ師秀ヲ追出
シタルヨリ應安元年マデハ八年ニナレリ信
盛康安二年ヨリ松山城主タルヲ知ラルベ
キナリ

第九代 秋庭七郎重継

第十代 秋庭三郎重明

第十一代 秋庭八郎頼重

第十二代 秋庭平之允頼次

第十三代 秋庭備中守元明

右共代 舊系ノマ、

第十四代 秋庭備中守元重

右ハ舊系ニナシ補之元重長享年年中ヨリ

永正四年ニ至マテ歴々トシテ記書記ニ出タリ蓋
シ元明ガ子ナルベシ下元明元明元重ノ諸記ニ出
ル其大略ヲ記ス此ノ時南北朝ニテ時代ヲ知ラザレハ分
リカヌルヲ多シ先ツ其ヲ記ス

延元元年後醍醐帝大和ノ吉野ヘ幸セシヨ
リ吉野ノ方ヲ南朝ト云フ後村上帝長慶帝
後龜山帝ト三種ノ神器ヲ御傳ヘナサレテ北
朝ノ明德三年ニ南北朝和シテ後龜山帝ヨリ

北朝ノ後小松帝ヘ神器ヲ御傳ヘナサレタリ北朝
ハ足利尊氏ガ光明帝ヲ宝位ニ立シヨリ崇
光帝後光嚴帝後圓融帝後小松帝ト
五帝帝合マテ年数五十六年後小松帝ノ明
徳三年ニ至テ南北講和セシヨリ王統一
歸セリ此ノ時將軍ハ足利義満義持ノ
時ナリ秋庭氏代々足利將軍ニ属セリ諸
記ニ載スル所ノ大略ヲ下ニ記ス

秋庭氏後ニ細川氏ニ属メ且利將軍
ニ仕テ嘉吉元年且利義勝ノ時ニ赤松
満祐ガ播州白旗城ヲ圍ム時ニ秋庭備中
守元明相從フ後太平記又宝徳元年且利義
政ノ天龍寺ヘ参堂ノ節隨兵秋庭備
中守元明トアリ應仁ノ比細川勝元ト山
名宗全ト七年ノ戦ニモ秋庭備中守元明
細川ニ属セリ

應仁元年丁亥ヨリ文明五年癸巳マテ七
年ノ間ノ合戦ニテ山名ハ西京ニ陣シ細川
ハ東京ニ陣ス細川ニ黨スル國守郡守ノ
士卒十六萬山名ニ黨スル十一萬ツイニ
諸州コト々々ク乱テ互相争フ我國未曾
有ノ大乱ナリ是レヲ應仁ノ乱ト云フ細川
ハ義政ヲ主トシ山名ハ義視ヲ主トス
義視ハ義政ノ弟ナリ此時分ノ戦争大

意ヲ知ラサルアレハ記中ニ鮮セサルヲアルヘシ因
テ記シ置ノミ

長亨元年九月將軍義尚江州坂本進
發ノ時ニ供奉ノ大名ニハ秋庭備中守元重トアリ
其後明應元年將軍義植大津坂本へ出
陣ノ時ニモ供奉ノ大名ニハ秋庭備中守元
重トアリ永正四年義植防州ヨリ歸洛
ノ時秋庭備中守元重三條ノ御所ヲ

衛護ストアリ然レハ元明ノ子ニ元重ナル者ア
リレナルヘシ因テ元重ヲ歴代ニ補入ス

按ニ巡禮記ニ永正四年ノ後秋庭氏ノ

子孫有漢ニ居住スト云ヘリ有漢中村中村ニ記スル所ヲ見ルヘシ秋庭三河守ト云ルハ美濃守ノ子孫ナラシカ臺

ノ城ノ城主ニ秋庭美濃守ト云ルアリ是レ其

子孫ナルヘシ最初ニ記スル如ク元祖秋庭三

郎重信ニ備中有漢ノ御ヲ賜トアレハ其

子孫ソノ土地ヲ有テルト久キヲ知ルヘシ

秋庭三郎信盛ヨリ秋庭備中守元重ニ至ルマ
テ七代松山ノ城主タリ年数康安二年ヨリ
永正四年マテ百四十六年七代ニ配當メ見シ年
數モ相當セリ

第十五代 上野民部太輔信孝

右旧系ニナシ補之永正六年ニ参州小谷
ヨリ国替ニテ来リ松山城主ナルハ民部太
輔ニテアルヘシ民部太輔奉且利義植公

命来在下道郡喜多山^村蓋後亦移于此

ト云ル是説是ナリトス小谷ヨリ移ルハ上野

刑部少輔氏之トスレ氏之ハ應仁年^中

人也永正六年ヲ距ル^ト凡四十年餘年數

モ尙アリ且備中ニ住スル傳記モ見ヘサレハ

此人ニハアラジ蓋民部太輔ノ父ナルカ民部

太輔ノ事跡ハ下ニ記スル傳ヲ見ルベシ

第十六代 上野兵部少輔頼久

右ハ舊系ニ參州小谷ヨリ移ルト云ヘリ是ナ
ラズ頼久ハ民部太輔ノ子ナルヘシ父ニ繼テ
松山城ヲ有ツ永正年中ニ頼久寺ヲ建立立
ス諱ヲ以テ寺号トス
頼久寺以前ハ天忠寺
又ハ大林寺ト号セリ 寺ハ
松山城下ニアリ

第十七代 上野伊豆守
右ハ頼久ノ子庄備中守為資ニ亡サル
第十八代 上野右衛門尉

右ハ伊豆守舎弟ニテ世ヲ受タルヘシ或云
子ナリト天文二年庄為資ニ伊豆守ト俱
ニ亡サル永正六年民部太輔城主タリシヨリ
天文二年マテ二十五年
植木ノ族若林次郎右衛門伊豆守
ノ首ヲ取ル

第十九代 庄備中守為資
右ハ尼子勝久ニ属ス備中小田郡横谷村猿
掛ノ城主タリ天文二年猿掛ヨリ松山城攻
来植木下総守秀長ト共ニ上野伊豆守

兄弟ヲ亡シテ松山ノ城主トナル

第二十代 庄備中守高資一作隆資

初名ハ又六ト云フ為資ノ子也

第二十一代 庄兵部太輔勝資一作修理輔

右高資ノ子也三代ニシテ三村家親ガ為ニ

亡サル天文二年ヨリ永禄三年禄マテ二十八

年

天文ノ比ハ備中ハ尼子ニ属ス大内ニモ毛利

ニモ随ズ三村家親成羽鶴ノ首ノ城ニ居城シ

毛利元就ニ属シ永禄三年加勢ヲ請テ

庄高資ノ松山城ニ押寄ル高資ハ子勝資ニ

軍勢ヲ付テ竹ノ庄へ差向シユヘ城中小勢ナ

シハ防クヘキヤウモナク城ツイニ陥リ高資ハ

シメ悉ク討死ス勝資竹ノ庄ニテ松山落城

スト聞テスヘキヤウナク雲州ニ落行ケリ下ニ

記スル其ノ傳ヲ見ルヘシ勝資ノ子毛利

勝資以下終言スルノミ

輝元ニ属ノ天正二年輝元兵ヲ起シテ三村
元親ノ松山城ヲ攻ル時勝資毛利ニ從テ軍
功アリシ由翌年備前見島^{ムキイ}麦飯ノ城攻
ル時モ小早川隆景ノ麾下ニアツテ麦飯ノ城
主明石源三郎ヲ鎗ニテ刺殺シツイニ討死ス
毛利ヨリ勝資ガ子宮若丸幼年ナレ兵ニ力
百ヲ与ヘテ津々村加^カ葉山ノ城ニ居ラレム後慶
長五年関原偃武ノ後毛利氏所有十州

ノ内八州ヲ除カル備中作州ヲ除カル、其中亦
於是庄氏牢落ノ備中津々村住ス今至
テ子孫綿聯トメ相續ケリ津々村里正庄
清治有漢上村里正庄要介^{アホ}部^イ村里正
庄茂兵衛是也

第二十二代 三村備中守家親

右ハ初メ修理亮ト稱ス本国參州ヨリ来
テ當国成羽鶴ノ首ノ城主トナル後毛利

元就ニ属シ永禄三年ニ毛利ニ加勢ヲ請テ
松山庄高資ヲ討取ル子孫部太輔勝資
ハ雲州ニ落行ケリ於是家親松山ノ城主ト
ナル夫ヨリ備中守ト改ム

永禄九年ヲヨシトス
元龜元年三村家親ハ毛利ニ案内シテ備
中ノ勢ヲ驅リ催シ備前ノ国ヲ征伐セトス
此時備前ノ宇喜多直家ハ備前ト美作
ト半国ヲ取テ毛利ヘハ曾テ從ハス。毛利加勢

アツテ家親六子騎ヲ卒テ美作ノ国ヘ攻入り
畝田ヲ討從ヘ佛子削經寺ニ本陣ヲ居ヘタリ宇
喜多ノ安スカラス事ニ思ヒ遠藤又三郎小笠
修理亮兩人ヲ竊ニツカハシ又三郎夜中ニ佛
經寺ヘ忍ヒ入テ障子ノ隙ヨリ窺ヒ一尺ニ寸ノ
小筒ニニツ玉ヲコニテ家親ヲ打殺タリ宇喜
多直家大ニ悦テノ喜テ釣スル如ク又三郎ニ
壹萬石ヲ与ヘ其上姓名ヲ改メシメテ宇

喜多河内守トスト云ヘリ下ノ傳ト詳記ス

シ其傳ヲ見ルヘシ

永祿九年二月八日卒ト頼久寺上棟ノ文出

家親ノ法名ヲ天忠源性大居士ト云フ暮ハ

頼久寺ニ在リ天忠ノ文字ハ頼久寺ノ白寺号

ヲ取レルナルヘシ但頼久寺ハ元天忠寺ト云

第二十三代 三村修理進元親

右ハ家親ノ子也天文年中ヨリ備中ノ

諸士或ハ藝州毛利ニ属シ或ハ雲州尼

子ニ属シ或ハ備前ノ宇喜多ニ与カシテ國中

靜ナラサルニ元親ノ父家親毛利元就ニ属

セシヨリ備中國ノ諸士三村ノ麾下ナリ相

續テ子息修理進松山ニ在城シテ川葉

幕下ノ士國中ニ守城シテ備中ハ毛利

家ノ領國ニシテ三村黨ノ食地ト加然ル

処天正元年將軍足利義昭公ト信長

ト確執ニ及ヒ義昭公ハ毛利ヲ頼テ備後

ノ鞆ノ津ニ居所ヲ定メ西國ノ勢ヲ卒メ上
浴アルヘシト兼テ用意アル処信長ヨリ三
村元^親使ヲ立テ今度元就將軍義
昭ヲ助テ上浴ノ窟ヘ有ル由元親信長カ味
方ニ加リ途中ニテ妨々候ハ備前備中
兩國ヲ宛行ヘシト計策ヲ申送リケル元親
悦ヒ是コソ願フ所ノ幸ナリ其故ハ父家親
累年宇喜多ノ遺恨ヲ含ミ數度戦ヒ玉

ヒシガ徳良ノ城ニテ美作ノ佛經寺ナラシ遠藤又三郎ニ
忍討シ^剗齋田ノ城主兄元祐モ同シ直家
ノ手ニ討シテ二代ノ怨敵追討ノ時ヲ待ツ所ニ
シテ信長ノ一味ノ誓使コリ時ヲ得タリト云
フヘシト申サレケルニ三村親成孫左衛門成羽城主其子
孫太郎親宣諫言スレ氏用ヒス却テ親成
父子ヲ誅セトス親成大ニ驚テ天正二年十一
月七日ノ夜松山ヲ退去シテ鞆ノ津ニ行キ元

大松山ハ三村左馬亮
親重天共衛尉親富
在リ元親ハ小松山ニ在リ
石川源左門尉久武ハ天
神丸ニ在リ
下ノ元親ノ傳并ニ里
村ニ藤原ノ所ヲ見ルヘシ

親謀反ノ由ヲ訴フ輝元驚テ小早川隆
景ヲ大将トシテ十一月八日備中へ差向ラル
輝元モ翌日山陣シテ笠岡ノ浦ニ至ル隆景
先ツ備中ノ端城ヲ攻落シ天正三年五月
松山城ヲ攻メツイニ落城ス元親城ヲ山ニテ松山
寺ニ行キ檢使ヲ請テ切腹ス其時和歌數首
アリテ知音ノ人々ニ贈^贈レリ辞世ノ一首左ニ記ス
人トイフ名ヲカルホドヤ末ノ露

支那キエテゾカヘルモトノ粟ニ
匠作源元親一瞬源樹居士ト書納ト云リ
永祿三年家親城主タリシヨリ天正三
年ニ至ルマテ十六年委シクハ下ノ傳記
ス
巡礼記ニ十五年トアリ

元親ノ墓モ頼久寺ニアリ原村奥灘池
ノ上ヘシ元親ノ祠アリ毎年六月二日祭禮
アリ

後太平記播州月、城落城、糸、真前、進、々、天野、土、島、右、上、門、元、明、カ、陣、ハ、使、者、某、々、ツ、カ、ハ、シ、山、中、麻、之、介、ヨリ、助、命、ラ、シ、フ、ア、リ、川、上、郡、阿、部、村、元、明、之、初、メ、ハ、土、島、右、上、門、ト、称、ヤ、シ、ナル、ヘ、シ、

第二十四代 天野中務元明

右ハ毛利ヨリ在番中務ヲ中書トモカクナリ

第二十五代 上野五郎右エ門元信

右ハ毛利ヨリ「天野ナリシ元明ノ子ナルヨシ梅井高左エ門ノ由緒書ニシテ代官トシテ差越有リ慶

長五年濃州関ヶ原偃武ノ後ヨリ退ク

毛利輝元天正三年三村元親亡シテヨリ毛

利元春ヲ猿掛ノ城ニ差置キ備中国ヲ

支配セシム然ル所織田信長天正十年

夏羽柴秀吉ヲ軍將トシテ高松ノ城ヲ水攻

ス此時京都ニ於テ明智光秀主人信長ヲ

弑ス是ニ因テ秀吉毛利ト和睦シメ軍ヲ

都ニ返ス此時ヨリ松山川ヲ堺トシ東ヲ宇

喜多ノ食地トシ西ハ毛利ノ領国トナツテ

當国無為ニシテ鬪争ノ患ナシ然ル處慶

長五年石田治部少輔三成大坂方ノ諸

侯ヲカタラヒ兵ヲ起シテ神君ト美濃ノ

ノ関ヶ原ニ於テ大ニ戦ヒ石田敗北セリ此時
毛利ハ石田ニ与リカシテ秀頼ヲ守護シテ
大坂城ノ西ノ丸ニ居ラシケシハ是レモ御退
治アルヘトテ先年ノ軍勢醍醐ノ邊マテ
及發向スル処今日毛利輝元ヨリ増田長盛
黒田甲斐守井伊兵部少輔ヲ頼和陸
ヲ請フ此事數度ニシテ御許容アリ輝
元ハ大坂ヲ山ニテ和州木津ヘ引ノキ増田

秀吉公五奉行ノ内
増田有正川亮長盛
死罪ヲ赦免セラレ郡
山二十万石没収高野
山ニ蟄居
秀吉公治世諸侯
分限
百二十万石
廿一州産直島
安藝中納言毛利輝元

ハ其居城郡山へ蟄居ス其輝元ハ十州ノ
領国八州ヲ削リ玉ヒ長川周防ノ二州ヲ
給フ此時備中関国トナリテ神君ヨリ御
身方トナリテ軍功アリシ諸將へ分領セシム

第二十六代 桂民部少輔元延

第二十七代 小堀新介一政正次トモ 後宗甫ト云

右ノ御當代ニナリ慶長五年御代官ニテ

御

一説ニ此年神君ニ謁奉リ食邑一万石ヲ賜リ
台年依テ當城ヲ警衛ス

第二十八代 小坂作助政一

右ハ一政ノ嫡子ニテ御代官御相續後遠

江守ト改ム慶長五年ヨリ同二十年マテ

父子ニテ十六年松山ニ在城

第二十九代 池田備中守長幸

右ハ因州ヨリ御別家也承国院前備

中守六萬五千石ヲ賜フ元和三年ヨリ

松山居城

第三十代 池田ハ羽守長成

右ハ父ニ継キ城主タリ寛永十六年三月

三歳ニテ卒ス男子ナク家断絶ス後同姓

ノ子ヲ立テ別ニ千石ヲ賜フ後月郡井原ノ

地ヲ領ス今池田筑後守殿其子孫ナリ

元和三年ヨリ寛永十六年マテ二十三年

居城

第三十代

水谷伊勢守勝隆

初備中国成羽ノ城主タリ
川上郡成羽ノ部ヲスルヘシ

右寛永十六年常陸ノ下館ヨリ国替ニテ

移ル方治二年玉島村赤嶋村ヲ開發ス

開発ノハ
玉島村部ニテ寛文四年五月三日辛酉年六

十八歳

第三十二代

水谷左京亮勝宗

右勝隆ノ子也天和元年辛酉正月小松山

ノ城ヲ築セ玉々今ノ松山城是ナリ繩張畑

角兵衛作事奉行永島萬九郎小薬師

万助大工玉木喜右左門

第三十二代

水谷出羽守勝賢一作美

右勝宗也元禄六年江戸表於テ乱心ニテ

葉伯耆守殿ハ御預トナリ領地御取上テ

相成ル高五舊系ニ記スルハ御在番淺野内

匠頭長矩御城代駒井内匠頭御目付堀

小十郎御代官平岡吉左衛門右ノ方々元

禄七年正月廿二日松山へ到着廿三日御城
請取相濟廿四日浅野内匠頭帰城家臣
大石内藏助残り相勤ムト記セリ義臣三原
秘録ニ記スルハ松山城請取ノ上使トシテ
播州姫路ノ城主本多中務太輔殿浅野
内匠頭殿御旗本ヨリ御目付トシテ石戸土
佐守殿大原河内守殿御代官トシテ廣
瀬丸内殿大久保外記殿以上六人ノ御官

使ヲ被差遣候處内匠頭殿御病氣ニテ御
名代トシテ大石内藏介ヲ遣ハサル其比松山
騷動ニ及ヒシハ山ノ羽守殿表ニテ御乱心稻葉
伯耆守殿へ御預ケニテ其儘七萬石召上ラレ
候トノ御上意ナリ松山ノ家老杉山軍太夫猶
方但馬ヲ始メ義臣數百人御養子ノ義ヲ愁
訴スレ氏不叶此上ハ為ヘキヨウナク筑前城ノ城
ニ骸ヲサラストモ容易ニハ渡サシトステニ合戦ニモ

及ハントスルヲ大石内藏介城ニ行テ杉山ニ對
面ノ様々ト利害ヲ申述ケシハ杉山モ遂兼
服シテ事故ナク城ヲ開テ渡シタルト云リ三原
秘録ニ山ニルハ事長シ此ニハ大略ヲ挙ルノミ
委シクハ其書就テ見ルヘシ
寛永十六年伊勢守居城ヨリ元禄七年
マテ年數五十六年

當国英賀郡小坂部ニテ千七百石水谷

信濃守同所ニテ三百石水谷小左門川上郡布
賀ニテ三千石水谷主水右水吾家ノ御末
葉也委シクハ其所ニ於テ記ス

第三十四代 安藤對馬守重傳一作轉

右ハ元禄八年八月六日上野国高崎ヨリ御
越シ居城セラル高六萬石

第三十五代 安藤藤右京進重行

右ハ重傳ノ子息継テ居城元禄八年ヨリ

正徳ト改元永八年城渡ノ日ナラニ五月マテ父子ニテ相續年數

七十七年

第三十六代 石川主殿頭一作宗總慶

右ハ正徳元年二月十五日國替仰付ラレタル日ナラニ當城へ御國替

山城國淀ヨリ御越高六万石延亨元

年六月三日迄三十四年御居城ニテ勢州

龜山へ御移古水古水古水古水古水

第三十七代 板倉周防守勝澄公行上夜市

右ハ近江守重治公ノ子也延亨元年甲子

三月朔日勢州龜山ヨリ當城へ國替仰モ蒙

ラル同六月三日龜山城兩宮權九門榭原

八兵工へ引渡シ同日當城ヲ川勝九京牧野

靱負ヨリ請取

寛延四年辛未九月廿三日御願ニテ隱居

第三十八代 板倉美濃守勝武

右ハ勝澄ノ子息也寛延四年ヨリ相續

第三十九代 板倉日向守勝從

右勝武、吉房也養子十九明和元年

甲申ヨリ相續

第四十代 板倉周防守勝政

右勝從、吉房也養子十九安永七年

戊戌ヨリ相續享和元年辛酉三月八日

御願ニテ隱居

第四十一代 板倉周防守勝駿

右勝政ノ嫡子也^享和元年元年辛酉三月

ヨリ相續

第四十二代 板倉周防守勝職

右勝駿ノ子息也文化元年甲子九月四日

ヨリ相續嘉永二年己酉閏四月^{六日}御願ニテ

隱居

第四十三代 板倉周防守勝靜

右嘉永二年閏四月ヨリ相續

... 壽永二年...

... 壽永二年...

... 壽永二年...

... 壽永二年...

... 壽永二年...

... 壽永二年...

... 壽永二年...

... 壽永二年...

